

2023年度

# 事業報告

自 2023年 4月 1日

至 2024年 3月31日

公益財団法人 正力厚生会

〔がん患者支援事業〕 計1848万6392円（予算2030万円）

### ＜患者団体への助成＞

全国のがん患者会や支援団体を対象に一般公募で活動資金を助成する事業で、24団体に助成した。新型コロナウイルスの影響がようやく収まり始め、ベッドサイドでの音楽演奏など病院内での活動も復活してきた。一方でオンラインやハイブリッド方式によるセミナーなどの開催も、より広く参加を集める手法として定着しつつあり、11団体が活用している。残念ながら、2団体が主宰者の病状悪化により申請した事業活動を中止し、助成金を全額返納する結果となった。

（予算680万円、支出620万7662円）

### ＜医療機関への助成＞

#### 「がん情報ギフト」事業継続の支援（100万円）

「がん情報ギフト」は、国立がん研究センターが図書館へがん治療情報の冊子セットを寄贈し、地域の拠点病院とも連携を図って、図書館に正しいがん情報普及の窓口役を担ってもらう事業。一般からの寄付を基に始まったこの事業の発展強化を目指し、2019年度から助成を行ってきた。

2023年度はこの冊子セットの一部更新・補充や、図書館と病院や自治体の保健医療部門が連携した啓発イベントの開催などに100万円を助成した。

冊子セットは全国679館（2024年3月現在）に寄贈され、図書館司書と拠点病院相談員らによる交流研修会や、がん関連選書の図書館巡回展開催なども行われている。

（予算100万円、支出100万円）

### ＜QOL（クオリティー・オブ・ライフ）向上への助成＞

#### □がん医療フォーラム

2023年11月26日に読売大手町小ホールで「がん医療フォーラム2023 活用しよう！相談と支え合いの場」を主催し、会場とオンラインを合わせて計326人の参加を得た。

担当医以外に頼り先がなく、生活面を含めて孤独と不安に悩むがん患者と家族に対し、適切な相談先や療養のための情報源、地域で支え合うがん患者会などを紹介することを狙いとした。がんの在宅療養支援プロジェクトを主導する帝京大医学部の渡辺清高病院教授がコーディネーター役となり、同教授と前国立がん研究センターがん対策研究所の高山智子部長、読売新聞東京本社の山口博弥編集委員（当時）が基調講演。同教授と鈴木雄一・読売新聞東京本社医療部長を司会に、患者団体代表やがん専門看護師らがパネルディスカッションを行った。

この開催内容は12月12日付読売新聞「安心の設計」面と、24年2月発売の冊

子「病院の実力」で詳報されたほか、同プロジェクトの協力で動画を編集、ネットで無料公開した。参加者アンケートでは「自分が病気をよく知ることが大切だと感じた。参加してよかった」「がん相談支援センターについては大変参考になった」といった多くの感謝の声寄せられた。

(予算640万円、支出622万2694円)

## □読響ハートフルコンサート

がん患者やその家族の心を癒すため、読売日本交響楽団員を全国各地のがん診療連携拠点病院に派遣し、弦楽四重奏などを披露する事業。一流オーケストラの楽団員による生演奏は、どこの会場でも大変喜ばれている。2023年度は予定した全国8病院中、1病院が演奏会場の病棟改築工事の遅れで中止となり、7病院で開催した。

(予算610万円、支出505万6036円)

以上